

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2020 年度

北海道千歳リハビリテーション大学 一般入学試験問題（A日程）

必修科目

国語総合

注意事項

- 1 文字や記号は明確に判読できるよう丁寧に記入しなさい。
- 2 この問題冊子は、12 ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 問題用紙の余白等は適宜利用してかまいません。
- 4 問題冊子は最後に回収します。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

毎週土曜日の午後、私は歩いて十分ほどのところにある一軒の家に向かう。その家は古くて、入り口には大きなヤツデの鉢植えが置いてある。カラカラと戸を開けると、玄関のたたきには水が打ってあって、スーッと炭の匂いがする。庭の方からは、チョロチョロとかすかに水音が聞こえる。

私は、庭に面した静かな部屋に入り、タタミに座って、お湯をわかし、お茶を点^たて、それを飲む。ただそれだけを繰り返す。そんな週一回のお茶の稽古を、大学生のころから二十五年間続けてきた。

今でもしよつちゆう手順を間違える。「なぜこんなことをするんだろう」と、わけのわからないことがいっぱいある。足がしびれる。作法はややこしい。いつまでやれば、すべてがすつきりわかるようになるのか、見当もつかない。

「ねえ、お茶って、何がおもしろいの？　なんでそんなに長く続けているの？」
こう、友達から聞かれることがある。

小学校五年生の時、親に連れられてフェリーニ監督の『道』という映画を見た。貧しい旅芸人の話で、とにかく暗い。私はさっぱり意味がわからず、

「こんな映画のどこが名作なんだろう。ディズニーの方がよかったのに」

と、思った。ところが十年後、大学生になって、再び映画を見て衝撃を受けた。「ジェルソミーナのテーマ」には聞き覚えがあったが、内容は初めて見たも同然だった。

『道』って、こういう映画だったのか！

1 胸かきむしられて、映画館の暗闇で、ボロボロ泣いた。

それから、私も恋をし、失恋の痛手を負った。仕事探しにつまずきながら、自分の居場所をさがし続けた。平凡ながらも十数年が過ぎた。三十代半ばになって、また『道』を見た。

「あれ？ こんなシーン、あったっけ？」

随所に、見えていなかったシーンや、聞こえていなかったセリフがいっぱいあった。無邪気なヒロイン、ジェルソミーナを演じるジュリエッタ・マシーナの迫真の演技に、胸が張り裂けそうになった。自分が捨てた女の死を知って、夜の浜辺で身を震わせ慟哭する老いたザンパノは、もはやただの残酷な男ではなかった。「人間で悲しい」と思った。ダラダラと涙が止まらなかった。フェリーニの『道』は、見るたびに「別もの」になった。見るたびに深くなっていった。

世の中には、「すぐわかるもの」と、「すぐにはわからないもの」の二種類がある。すぐわかるものは、一度通り過ぎればそれでいい。けれどすぐにわからないものは、フェリーニの『道』のように、何度か行ったり来たりするうちに、後になって少しずつじわじわとわかりだし、「別もの」に変わっていく。そして、わかるたびに、自分が見ていたのは、全体の中のほんの **b** ダンペンにすぎなかったことに気づく。

「お茶」って、そういうものなのだ。

二十歳のとき、私は「お茶」をただの **1** としか思っていなかった。 **A** 鋳型にはめられるようで、いい気持ちじゃなかった。それに、やってもやっても、何をしているのかわからない。一つのことになかなか覚えられないのに、その日その時の気候や天気に合わせて、道具の組み合わせや手順が変化する。季節が変われば、部屋全体の大胆な模様替えが起こる。そういう茶室のサイクルを、何年も何年も、モヤモヤしながら体で繰り返し返した。

すると、ある日突然、雨が生ぬるく匂い始めた。「あ、夕立が来る」と、思った。庭木を叩く **c** アマツブが、今までとはちがう音に聞こえた。その直後、あたりにムウツと土の匂いがたちこめた。

それまでは、雨は、「空から落ちてくる水」でしかなく、匂いなどなかった。土の匂いもしなかった。私は、ガラス瓶の中から外を眺めているようなものだった。そのガラスの **B** 覆いが取れて、季節が「匂い」や「音」という五感にうったえ始めた。自分は、生まれた水辺の匂いを **C** 嗅ぎ分ける一匹のカエルのような季節の生きものなのだということを思い出した。

毎年、四月の上旬にはちゃんと桜が満開になり、六月半ばころから約束どおり雨が降り出す。そんな当たり前のことに、三十

歳近くなって気づき **D** 愕然とした。

前は、季節には、「暑い季節」と「寒い季節」の二種類しかなかった。それがどんどん細かくなっていった。春は、最初にぼけが咲き、梅、桃、それから桜が咲いた。葉桜になったころ、藤の房が香り、満開のつつじが終わると、空気がむっとし始め、梅雨のはしりの雨が降る。梅の実がふくらんで、水辺で菖蒲が咲き、**E** 紫陽花が咲いて、くちなしが甘く匂う。紫陽花が終わると、梅雨も上がって、「さくらんぼ」や「桃の実」が出回る。季節は折り重なるようにやってきて、**2** というものがなかった。

「春夏秋冬」の四季は、古い暦では、二十四に分かれている。けれど、私にとってみれば実際は、お茶に通う毎週毎日がちがう季節だった。

どしゃぶりの日だった。雨の音にひたすら聴き入っていると、突然、部屋が消えたような気がした。私はどしゃぶりの中にいた。雨を聴くうちに、やがて私が雨そのものになって、先生の家の庭木に降っていた。

(**3**) 「**3**」って、こういうことだったのか!

ザワザワツと **d** トリハダが立った。

お茶を続けているうち、そんな瞬間が、**2** 定額預金の満期のように時々やってきた。何か特別なことをしたわけではない。どこにでもある二十代の人生を生き、平凡に三十代を生き、四十代を暮らしてきた。

その間に、自分でも気づかないうちに、一滴一滴、コップに水がたまっていたのだ。コップがいっぱいになるまでは、なんの変化も起こらない。やがていっぱいになって、表面張力で盛り上がった水面に、ある日ある時、均衡をやぶる一滴が落ちる。そのとたん、一気に水がコップの縁を流れ落ちたのだ。

もちろん、お茶を習っていなくて、私たちは、段階的に目覚めを経験していく。たとえば、父親になった男性が、「おやじが昔、お前にもいつかわかる、と言ってたけど、自分が子どもを持つてみて、ああ、こういうことだったのかとわかりました」

などと口にする。

「病気をきっかけに、身のまわりの何でもありませんが、ものすごく愛おしく感じられるようになった」という人もいる。

人は時間の流れの中で目を開き、自分の成長を折々に発見していくのだ。

だけど、e ヨブン¹なものを削ぎ落とし、「4」²を実感させてくれるのが「お茶」だ。最初は自分が何をしているのかさっぱりわけがわからない。ある日を境に突然、視野が広がるところが、人生と重なるのだ。

すぐにはわからない代わりに、小さなコップ、大きなコップ、特大のコップの水があふれ、世界が広がる瞬間の³醍醐味⁴を、何度も何度も味わわせてくれる。

四十歳を少し過ぎ、お茶を始めて二十年以上たったころから、私は友達に「お茶」のことをしゃべるようになった。すると友達達は、

「えっ！ お茶って、そういうものなの？」

と、ものすごく意外な顔をした。その反応に、私の方が驚いた。多くの人は、「お茶というのには、金のかかる風流人の遊びらしい」と想像するだけで、それをするとどんなことを感じるものなのか、ということなど全く知らされていない。私自身、少し前までそうだったのに、そのことをすっかり忘れていた。

その時から、いつか「お茶」のことを書いてみたいと思うようになった。この二十五年の間に、先生の家のお稽古場で感じた、たくさん季節のこと、コップの水が、あふれる瞬間のこと。

子どもころにはわからなかったフェリーニ監督の『道』に、今の私はとめどもなく涙を流す。理解しようと努力などしなくとも、胸えぐられる。人には、どんなにわがわがとあがいたところで、その時がくるまで、わからないものがあるのだ。しかし、ある日、わかってしまえば、それを覆い隠すことなどできない。

お茶を習い始めた時、どんなに頑張っても、自分が何をやっているのか何一つ見当もつかなかった。けれど、二十五年の間に段階的に見えてきて、今はなぜ、そうするのがおぼろげにわかる。

生きていく時代を生きる時、真っ暗闇の中で自信を失った時、お茶は教えてくれる。

……

(森下典子『日日是好日』)

問一 AからEまでの傍線——の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 aからeまでの傍線——のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 本文中の〔1〕に入る語句として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 外交儀礼

イ 行儀作法

ウ 伝統行事

エ 通過儀礼

問四 本文中の〔2〕に入る語句として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 限界

イ 中間

ウ 空白

エ 変化

問五 本文中の 3 に入る語句として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 生きてる
- イ 自分を見失う
- ウ 目覚め
- エ 病んでる

問六 本文中の 4 に入る語句として最も適切なものを次のア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 他者が感じ取れる自分の成長
- イ 自分で確認できる自分の成長
- ウ 自分では見えない自分の成長

問七 本文中の傍線……………1・2・3について、その意味に最も近いものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- 1 「胸かきむしられて」
- ア 何かをしたことについての当惑や後悔
- イ どうしようもなく悲しくて残念な心持ち
- ウ お手あげ状態となり覚悟し観念すること

2 「定額預金の満期」

- ア 一滴一滴コップにたまった水がコップの縁を流れ落ちた時
- イ どしゃぶりの雨の中、聴き入っていた自分が雨そのものになった時
- ウ お茶の真髄にふれた時

3 「醍醐味」

- ア 映像や残像など
- イ 体感や嗅覚など
- ウ 面白みや味わい

問八 筆者は、お茶の真髄にふれることができず、お茶を表面的にしか眺めていなかった自分の姿のことを、ある言葉でたとえている。最も適切な個所を本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問九 本文の最後に、「生きにくい時代を生きる時、真つ暗闇の中で自信を失った時、お茶は教えてくれる」という文章がある。お茶は何を教えてくれるのか。これに続く「……」の部分に入る最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 「四季は古い暦では二十四に分かれていること」
- イ 「ありふれたことがそのうち愛おしくなる」
- ウ 「映画『道』が理解できるようになる」
- エ 「長い目で、今を生きろ」

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本人は、火と水に対して十分な観察をくりかえしながら、一方では、たえず変わらぬ祈りを捧げてきた。

火と水の両者を、自然のその性格にさわらず安全に **a** カンリしさえすれば、人間にとってなによりも大切な生命や生活を **A** 護れるという信仰をもった。日本人の自然についての考え方は、太陽と火と水とを基本にして組み立てられているといっても、決していいすぎではない。

しかも、日本人は、その火と水とを共存させ、調和させる本質的な自然の法則をも『気』とよんだ。この『気』という言葉は、日本語の中でも非常に複雑な意味をもつ用語であった。

たとえば、私たちが生きていくためには、『元氣』が必要だとされる。この元氣は、現在の科学的でない方でいえば、生命現象であるところの全身に活動している一種の静電気の **b** ジュンカンである。さらには、宇宙の中にある一つの法則、物理的なルールさえも、日本人は『気』とよぶのである。

今、テレビの予報などという『天気』は、もとの意味が変わって、自然現象としての気象を、とくに天気とよんでいる。しかし、もともと『天気』という言葉は、天地自然現象のルールをさしていたのである。『気』は大自然のバランスとそれを動かす根元的なルールであった。しかも、ときには静電気現象でもあった。万物が生きていくもとの精気を、日本人は古代から『気』とよんだのである。(中略)

大気の中で、強い生命力をもって生長しつづける植物のさまざまな形を目の前に見て、現在の科学的な説明によれば、植物は肥料を吸収し、空気中の酸素を呼吸し、さらに、太陽光線を受けて……というような説明ですむが、古代の日本人は、そうは考えずに、土そのものに生命の原動力があると思っていた。これも日本人のいう『気』である。

日本人は **1** 即物的にもものを感じ、身体の中に火を感じていたから、『気』は厳密にいうと、 **2** 観念的な仏教の五大(空風火水地)とは少し意味が違っていた。

土の生命力を植物が受けるために根を張り、生気を發揮して、上に枝を繁らせ、花を咲かせ、実をつける。すなわち、花が咲いたり実をみのらせる不可思議な『氣』の働きは、土がもっているエネルギーのあらわれであり、『氣』のもつ力の表現だという解釈をしたのである。

もちろん、その土も、土だけでは植物を生長させることができない。やはり、そこには、水が必要である。

また、熱も必要である。燃える火でなくても、太陽の熱でいいのだが、その自然の火にあたる太陽熱と、大切な水があれば、それが土に結びつく。

一方、すべてのものは死ぬと、再び土に **B** 還る。日本人の魂も土に還る。

神話では、死んだのち、伊邪那美命は黄泉の国に行くが、それは、還っていく死の世界は、土の中だから、具体的には中国山脈の比婆山という山に葬られることによって、抽象的な死の世界に行つたのである。(中略)

だから、黄泉の国は地下にあると信じた。しかし、一方、海岸地方では、黄泉の国はずっとはるかかなたにある水平線の向こうの目に見えない世界だとも思われていた。このため、日本人の意識の中では、黄泉の国は地下であると同時に、海のかなたにもなった。

おそらく、このような世界観の成立は、陸上農民的な体験 **1** と、海岸海洋的な体験 **2** が併存していた実生活の **c** トウエイかもしれない。(中略)

そういう意味で、日本人が考えつづけてきた死の世界は、普通は地下の世界であった。地下は母なる大地でもある。魂のふるさとである。生命の原体である。そして、その上に、万物すべてが成長できるという考え方が生まれた。これこそ、日本人が土地に対して、後の時代にまでいなく愛着心や **C** 畏敬の念のもととなった。(中略)

要するに、日本人の世界観や人生観は、その基本に、まず天と地を置いたのである。そして、その上に生じる火(熱)と水、そして、それを動かすルールである『氣』、それらすべてがたくみに総合され調和されて、そこに人生もあれば生命も生まれるという考え方を育てあげた。(中略) 仏教には存在しない独自の発想である、自然をたえず人生を **d** キハンとしてみる考えがあつ

た。

現代人は、人生観や世界観から信仰的なものまで、客観的・経験的事象を証明しなければ満足できない傾向にある。それを欠いた古代日本人の直観的な世界観などはきわめて次元の低い迷信的な考え方だとする人が多い。しかし、経験的実証は、自然科学の基礎であるが、直観をムード的なものや信仰的用語で表現するのが古来、日本人の癖であり、直観的な表現や理解のかけに、科学的なものとは一致するものがすくなくない事例を知っている以上、古代日本人の比喩の科学性を考えなおす必要がある。

とくに、日本人の総合的・調和的な全体把握の思考傾向は、分析的実証的な科学の D 拓くことができない分野を理解するのに有効である。

実証科学の価値も、もちろん、十分に承認しながらも、実証科学のみが事実を知る唯一の方法だとは、私には思えないので、古代日本人の自然観が直観的である理由をもって、あながち軽視すべきものでないと思うのである。

(樋口清之『日本人の歴史I』)

問一 AからDまでの傍線——の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 aからdまでの傍線——のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 本文中の 1 に入る語句として最も適切なものを次のア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 集落生活

イ 農耕

ウ 埋葬

問四 本文中の 2 に入る語句として最も適切なものを次のア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 水上生活

イ 漁労

ウ 水葬

問五 本文中の傍線……1・2について、その意味に最も近いものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

1 「即物的」

ア すぐに行くことまたはたちどころに効果が現れること

イ 頭の中だけで考えるのではなく現実をありのままに受けとめること

ウ そのときその場の雰囲気や感興にしたがって行動すること

2 「観念的な」

ア 事物に即して考えるのではなく頭の中だけで組み立てられていること

イ 心的活動ないし意識内容が事象に対応していること

ウ 現実から遊離した夢想的状態のようであること

問六 著者が本文中で最も言いたいことは何か。それを最もよく表す箇所を二十四字以内で抜き出しなさい。

問七 この文章に最も適切な題名を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 生と死の根源
- イ 『気』の解明
- ウ 輪廻転生法則
- エ 自然と日本人

受験番号

第二問

問一

A
B
C
D

問二

a
b
c
d

問三

問四

問五

2	1

問六

問七

--	--	--	--	--	--	--	--